

渡辺 明という人 V ( 理論の追求 ~ 実技の監督へ )

2012年9月3日、久しぶりにアキラさんと昼食を共にした。

ロンドンオリンピックがビートルズの名曲「ヘイ・ジュード」で開幕して、スポーツの暑い熱い夏が終了したかと思うと、この9月のロンドンはパラリンピックの真最中である。

アキラさんとはスポーツ選手の年齢に関する会話となった。「ハンマー投てきの室伏広治選手」や「水泳の北島康介選手」などの、忍び寄る高年齢との戦いを、まざまざと見せつけられた今回のオリンピックでもあったと思う。それらは、若手の成長著しい、勢いの波に乗る選手の華々しさとは対症的な姿でもあった。勝負の世界のこのような側面をアキラさんも意識して観戦していたらしく二人の会話は暖まったエンジンみたいに回転しながら、モトクロスライダーの選手生命を左右する年齢にも及んでいった。

私……そういえば、室伏選手が試合後のインタビューで話していたことが印象的でしたよ。

『年齢を重ねてくると共に、調子の良し悪しの「変動幅」が増幅してくる』と語っていたんですよ。

アキラさん……その場面は見ていなかったけど、それは、アスリートにとって切実な問題ですよね。あらためてそう表現されると、自分も年齢が30歳を超えたころ経験したことを思い出しますね。

私……アキラさんもやはりそうだったんですか……。

アキラさん……特にスプリントのモトクロスは、ライダーの限界100%に「プラス $\alpha$ 」の走りを要求されるからね……。

私……陸上競技や競泳は、飛距離やタイムの記録が落ちるで、済むけれども、モトクロスは転倒、大怪我というリスクが増すわけね……年齢と共に……。

私……昔の話ですけど、「ジョン・サーティーズ」という、ロードレース界の名ライダーが、語った一言を思い出しましたよ。『私の知る限り、優秀な選手は皆、最後まで死ぬことはなく生きている』という言葉です。確か、「モーターサイクリスト」の記事だったかな……。

アキラさん・・・この辺りは、ライダーすべての人に係わることなので重要なことですよ。

このような折、わたしは、ヘレン・ケラーの始めて書いた本『楽天主義 (OPTIMISM) (岡文正監訳2005年版)』を、読み終えたばかりだった。

「パラリンピック」が開催されているからではなかったが、「見えず、聞こえず、話せず」の三重苦を克服して、世界の障害を持つ人々を励まし続けたヘレン・ケラーは「奇跡の人」という「代名詞」を持っている。しかし、この「奇跡の人」とは、当初、一般的に知られている「ヘレン自身」ではなかった。光なき闇の中で、父母の声さえ聞こえず、もちろん話せずの、文字通り「八方ふさがり」のヘレンに指文字とアルファベットを教え、井戸から汲みあげて飲む「水」に「W・A・T・E・R」という名称があることを、身をもって教えたのが、有名な「アン・メーシー・サリバン女史」であった。元々はこのサリバン先生の存在を指して「奇跡の人」と、称したというのである。

日本にヘレン・ケラーのことが紹介された折、翻訳の手違いでヘレン自身が「奇跡の人」と呼ばれたことに起因するらしい。

三重苦のヘレンや重度の障害を持つ人は、世間から一人前と見なされない風潮がどこの国にも存在したらしい。そのような中、ヘレンに文字を教え「人生の意味」と「世界の存在」を教えたサリバン先生の存在こそが「奇跡の人」であったというのである。この事実をわたしは知らなかった。

この翻訳の「手違い」は、考え方と見方を正せば障害を持つ方々への「偏見を糾す」という意味において、気の利いた「手違い」であったと思う。

どちらにしてもこの二人は、共に「奇跡の人」と呼んで云いと思う。師弟の関係であり「一体不二・師弟不二」の関係なのだろう。100頁ほどの薄いこの本は、ヘレンの大学で点字を通じ学び得た、この世の中の多くの事象、思想、哲学を「光として」吸収した輝かしい青春の記録でもある。

その生きる歓喜に溢れた文々句々は、題名の「楽天主義・OPTIMISM」に集約されている。

この日アキラさんにうまく話をまとめられず、この本を図書館に返却する日でもあり、感動したところをコピーして、小冊子として置いたのでこれを渡した。

今年の「ネイションズ」の日本チーム監督も引き受けて忙しいことや、ヨーロッパのモータースポーツ事情など、イギリスやベルギーなどでは「世界制覇者」には、王室からの勲章や「s i r」

の称号まで贈られているなどの会話から、いつものことであるけれども、モータースポーツ界に於ける、日本文化のふがいなさを、わたしが不満げにのべてこの日は別れた。

翌日の朝、わたしは、思いついたように、彼に電話をすると、パソコンを打ち込むような音がしているのに、いま、大丈夫?とか、気遣うような素振りをしつつも、一方的にわたしが話していく。

「昨日ね、頭の中、まとまっていなくて上手く話せなかったことだけど……」

「ヘレン・ケラーのコピー渡したけど……。端的に表現すれば、アキラさんの「ベストテク」ね、あれはサリバン先生がヘレン・ケラーに文字を教え思想を学ばせたことに通じる気がするんですよ。次元は違うかもしれないけど……。」

アキラさんが照れ笑いしながら「なるほど……」

「健全者ならそれなりにマシン乗れるでしょう。でもね、レースという競技の中ではライディングにアキラさんの「ベストテク」という「イメージ」の確立が必要で、それは、意識の中のことであり、表には見えにくい範疇のことですよ。具体的に見えるのは、「ライディングフォーム」に、投影されることですよ?」

「その通りですね」と、アキラさんが応える。

そういう意味で、譬えれば、オフロード界の「サリバン先生」がアキラさんの存在なんです。何の考えもなしにコースを走るライダーは、アキラさんから見るならば危険に感じるでしょう。危険この上ないという意味で……。まして、その危険なフォームの延長線上には、決して未来の「ワールドチャンピオン」は存在しないということになるんですよね。

今日、朝から電話したのは、きのう、話したくてもまとまっていなかった、以上のことを、伝えなかったからですヨ……。じゃ、今度の名阪のレース頑張ってください。電話を切った。

パラリンピックなどにかこつけて、ベストテクに繋げたりして申し訳なく思ったりもするが、「渡辺明のベストテク」の延長線上には、ワールドチャンプ獲得とはべつに、このおかげで、車椅子生活に陥らないという、無数のライダーが「未来に決して見えない形」で存在していくのである。これら「ベストテク」の付加価値は、「金メダル獲得」よりも、はるかに重く、いつまでも輝き続けるのである。

ヘレン・ケラーに、生きる意味と、光を与えたサリバン先生は69歳でこの世を去った。

1936年10月20日のことである。

この悲しみの日、56歳のヘレンは涙ながらに叫び続けた。

Teacher ! and yet again

Teacher ! and that was all

It will be my answer

In the dark when death calls

『先生！ そしてもう一度 先生！ あなたがすべてでした

それが私の答えです。暗闇から、死が、私を呼ぶときでさえも 』

「暗闇から・・・」との表現は、なんと素晴らしいものだろう。「光無き世界」に生きているのに、この場に及んで、この表現を使えるということは、見えていることと同義なのである。

日本を訪れた時に、犬の大好きなヘレンが「忠犬ハチ公」の「渋谷駅で主人を待つ話」を知っていて、渋谷駅の「ハチ公」の銅像に触れている写真が残っている。その満面のヘレンの笑顔がすばらしくて、いつでも脳裏に思い描けるほどである。

アキラさんのベストテクを理解できない一部の人が、その「腹癒せ」にか、ホームページに悪態を突いたりしているが、このような下劣な人はサリバン先生でさえ救えないに違いない。

『Hey Jude (Akira) ! don't make it bad

Take a sad song and make it better

Remember to let her into your heart ,

Then you can start to make it better』

『へい、ジュード！ 落ちこむことないよ、悲しい歌でも気分次第で楽しく聴ける。

忘れちゃいけないのは、あのコを理解し受けとめてあげること。

そうすれば、きっと君は、もう、新しい日々を歩み始められる・・・。』

2012年9月19日

玲 哩 詩 音

## 渡辺明という人 VI

2012年10月の末、年間のシーズンが終了したアキラさんの栃木県市員のコースを久しぶりに訪ねた。数人のベストテクスクール受講生が練習に励んでいた。

休憩時間はとても静かで、あまり聴いたことのない鳥の鳴き声だけが辺りを支配している。コース中央に皆が自然なかたちで丸くなり、自然な雰囲気ですらいでライディング談義となった。ぼくが「今年のネイションズの覇者国はドイツでしたね。」と話しかける。今年の日本の監督も務めたアキラさん。開催国ベルギーで往年の世界チャンピオン達と再会した感動を伝えてくれた。「J.ロベール」「R・デコスター」など



歴史に残る名ライダーと国際交流ができるのも「世界チャンピオン '78」の実績がアキラさんにあるからである。ぼくがアキラさんの写してきた「カイローリ」の



A.カイローリの走り、小さな体で今年伝説の J.ロベールに並ぶ6度目の世界タイトルを獲得した。

ライディングフォームの素晴らしさを讃嘆すると、それが「ベストテク」の見本であると語り、アキラさん熱を込めてのトークとなる。受講生たちは、うなずきながら聞き入っている。その様子を、第三者的にぼくが窺っている。聞いているライダーはその「内面のイメージ」を確かに感じとっている様子が「肌」というか「地下」に伝わってくる。アキラさんが、「うるさ過ぎるエンジン音のライダーはいけませんネ、暴走族じゃないんだから！」というと皆が笑う。

わき合いあいの雰囲気の中、ぼくが口をはさんだりする。

「エンジン音が大きすぎるライダーは、つまり、トラクションが甘いということでしょう？」アキラさんが「そうそう！といいながら、カイローリの走りを手まね足まねで、ついでに口で「エンジン音」を再現する。これが、なかなかなのです。

ものまねの「コロッケさん」でも、この「何気ない？」表現はできないはずである。2012年度、世界チャンピオンの「カイローリ」の、走りの内面までも「ものまね」できるのは、同じ「ベストテクニック」を持っているアキラさんだからである。ここに、この様に書き記すことで、何気ないこの光景が、実は大変な意味のある事なのではないだろうか、ぼく自身があらためて気がつくのである。

後日、昼食しながらの光景を「フェイスブック」に写真を載せたりして、このところ「スマホフォン・フェイスB」にはまっているアキラさんである。



斉藤氏とのランチ

ここでぼくが、ロードレース界

‘77年日本人初350cc 世界チャンピオン「片山敬済」のを持ち出したの

であるが、同じく日本人初のMX '78世界チャンピオンがアキラさんであり、このご両人に、部門は別であるが共通性を感じるのである。片山選手のあとに何人かのライダーがWGPを制しているが、ぼくが、片山さんだけは次元がちがうタレント性を持っていると評して、同じくアキラさんにも通じるものを感じると話した。

おそらく、このように云われれば「そう思う」と感じるMCファンもいるに違いないと思う。そこでぼくがON・OFFチャンピオンの「二人の対談」を、何らかの形で行い、それらを記録して置くことも大切ではないだろうか、提案させてもらった。ふたりの縁のある場所、宇都宮と神戸の二ヶ所でどうかな?などと「走りは遅い」が、「気の速い」ぼくが勝手に決めたりしている昼食会である。

今年、スズキのワークス監督に就任したアキラさん、初年度の戦歴は「IA2・山本鯨選手」が年間チャンピオンを獲得した。この「山本鯨選手」は、アキラさんの愛弟子であり「ベストテク受講生」により、初の全日本IAチャンピオンを制覇したのである。



そういう意味もあり、今年度は新たな歴史を刻む2012年であったと思う。

数ポイントの競り合いを最終戦ヒート2までにもつれ込んだ戦いであった。

山本鯨選手に「おめでとう」の祝福をファンの皆さんと共に贈ろう。そして、初陣の戦いの一年間、アキラさん、本当にご苦労さま、お疲れさまでした。

ぼくは片山敬済さんと同年代生まれで同じ時期に、彼は、「ロードレース」ぼくは、「MX」と青春を「まっしぐら・・・でもないか」フラレっぱなしの走りだったからネ・・・そんなサイトウよりの近況報告でした。